

受験番号

氏名

2021 年度

# 国 語

時間50分 100点満点

## 受験上の注意

1. 問題用紙・解答用紙には、受験番号・氏名を記入してください。
2. 答えはすべて解答用紙に記入してください。  
記入の方法を誤ると得点になりません。
3. 終わりの合図とともに、問題用紙・解答用紙を提出してください。

東京女子学園中学校

一 次のカタカナを漢字に直し、漢字は読みをひらがなで答えなさい。

- 1 きゆうすで茶をソソぐ
- 2 左右タイシヨウの図形
- 3 フイに声をかけられた
- 4 弁当ジサンで参加する
- 5 油断はキンモツだ
- 6 家で養生しなさい
- 7 野菜を出荷する
- 8 弱音をはいてはいけない
- 9 手を挙げて意見を述べる
- 10 一期一会

二 次の――は成句です。□に入ることはをひらがなで答えなさい。なお□の中の数字は字数です。

- 1 ちゃんちゃらおかしい。□で茶をわかす
- 2 四の□1の言わずに、さつさとやれ
- 3 正々堂々、□1つに組む
- 4 体ばかり大きくて、役立たずな□2の大木だ
- 5 笑う門には□2来たる

三 次のことばの対義語を語群から選び、漢字に直して答えなさい。送りがある場合、送りがなも書きなさい。

- 1 下校
- 2 のびる
- 3 いやしい
- 4 たくわえる
- 5 だいたん

【語群】 たつとい      とうり(ら)う      しよ(う)しん      ちぢむ      つ(づ)やす

#### 四 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

小説家の「私」の両親は、老人二人だけで暮らしていたが、父の死後、母は末娘の桑子に引き取られている。

母が明治二十六、七年頃に十七歳で亡くなった親戚の少年である俊馬なる人物の名をしきりに口に出すことに、私が気付いたのは去年の夏であった。その夜、私は客を築地の料亭に招んでいて、帰宅した時は十一時を廻っていた。居間の長椅子に腰を降ろすと、隣りの八畳間から子供たちの声に混じって母の声が聞こえていた。おばあちゃんが来ているなど私は妻の美津に言った。私も、家の者たちも、私の弟妹たちも、みな母のことをおばあちゃんと呼んでいた。①「そうなんです、どうした風の吹き廻しか、と美津は笑って言った。夕方、②桑子から電話がかかって来て、母が珍しくそちらに行くと言いだした。一晩泊るとすぐまたこちらへ帰ると言い出すに決まっているが、いったん口に出すと諾かないので、くるまで送り出すから預かって貰いたいという話だったと言うのである。

——おばあちゃんが俊馬さんのことを好きだったのは判るよ。でも、そんなに俊馬さん、俊馬さんと、俊馬さんのことばかり言うのはみっともないよ。八十にもなって、そんなこと言うもんじゃやないの。」「言うもんじゃやないの」の「の」に力を入れて高校三年の次男が言っている。

——好きなものかね。

母の声である。

——あれ、おばあちゃんごまかしている。おばあちゃんは俊馬おじいちゃんが好きだったじゃないか。え、嫌いだっただの？ ね、嫌いじゃないでしょう。

——俊馬おじいちゃんだなんて、おじいちゃんなものかね。丁度あんたぐらい。

——生きていれば今九十近いでしょう。

——そうかしら、そうはなるまい。

——だって、おばあちゃんと七つか八つ違っているじゃないか。

——いま生きていればと言っても、その時死んだんだから仕方ない。丁度あんたぐらいだった。①

1

年齢は同じくらいでも、あんたたちよりもずっと優しくかったし頭がよかった。

③子供たちのうわあつという歓声で母の声は消えた。誰かが背後にひっくり返ったらしく襖が音を立てた。喋っていたのは次男であったが、大学の長男の笑い声も、中学の次女の笑い声も聞こえる。子供たちの笑い声に混じって、 2 調子を合わせなくてはと思ったらしいそんな母の  あ  も聞えている。ひどく賑やかだった。

「子供たちにおばあちゃんをからかわせてはいかんね」

私が言うと、

「おばあちゃんの方がいけないんです。ここへ来る度に、子供たちをつかまえては、俊馬さん俊馬さんと俊馬さんの話ばかり聞かせるんですから」

美津は言った。

「どんな話をするんだ？」

「俊馬さんは優しくかったの、十七歳で「高へはいつて秀才だったの、生きていたら大変な学者になったらうの、④あれじゃ、子供たちだつてからかいたくありませんわ。弟の武則さんのことも同じように自慢して話しますが、俊馬さんほどではないようです。この前亡くなったおじいちゃんの命日の時、夕御飯におばあちゃん招んだでしょう。あの時も、俊馬さんの話ばかりしているんで、わたし、そんなに俊馬さんの話ばかり

していないで、おじいちゃんのこと少しは話して上げないと、<sup>⑤</sup>おじいちゃんに義理が悪いでしょうって  
言っただげたんです」

母がそうした話をするということは私は全然知っていなかった。妻は知らないとは思議だという顔を  
して、

「俊馬さんのことを話すようになったのは、もう大分前からですよ。聞いたことないんですか。子供のあな  
たの前では話さないのかしら。——おばあちゃん、そのひと好きだったんでしょね、よほど」

「驚いたな。親父さっぱりだな」

私は言った。

私も 3、俊馬と、その弟の武則という名前は自分の家に何らかの関係を持った一族の一員として  
記憶していた。母とは所謂どこがいの関係にあり、母の父親、4 私の祖父と俊馬兄弟とは従兄弟  
同士の間柄であった。この兄弟は幼時早く両親を失った関係で私の家にはいり、母と一緒に育てられたらし  
かったが、俊馬は第一高等学校にはいつて間もなく亡くなり、その弟の武則もまた同じ学校に在学中他界し  
た。二人とも亡くなったのは十七歳だった。十七歳で一高へはいるくらいだから母が言うように二人共秀才  
だったかも知れない。郷里にある私の家の墓地には、その東南隅に二人の少年の墓石が並んで置かれている  
が、兄の方は私の家の姓になっており、弟の方は姓を変えていない。私は幼時から何となくわが家の墓地に  
<sup>⑥</sup>正系でない者が紛れ込んで眠っているような気がしていた。

母がしきりに俊馬の話をするということを知ってから、私はそれとなくそのことに注意した。家で知らな  
かったのは私ばかりで、母が自分の恋人でもあるように俊馬についてはかり話すことは手伝いのおばさん  
までも知っていた。桑子が来た時そのことを話すと、おばあちゃんたら私の前では決して言わないの。でも、  
そのことは郷里でも親戚でも有名よ。私たち子供たちには言わないところは、やはり遠慮というものかしら。  
おばあちゃんにもまだそれだけの分別はあるのね。そんなことを言った。

①-3

母が俊馬について話すと言っても、その話の内容たるや頗る簡単なものであった。優しかったということ、  
秀才だったということ、ある日勉強している時、庭から縁側へ近づいて行くと、上がって来てもいいよと声  
を掛けてくれたということ。こういうことだけであった。当事母は七歳か八歳かぐらいの筈である。上がっ  
て来てもいいよと相手が声を掛けてくれたということは、少女だった母には一生忘れることのできぬ事件だ  
ったのかも知れない。母はそれ以外のことは何も話さなかった。話さないというのは話すことがあっても話  
さないというのではなく、恐らくそれ以外に何も記憶していることはないであろうと思われた。あらゆる  
関心事の中で、この俊馬に対する関心事だけは、<sup>⑦</sup>いつまで経っても母の頭から消えないものようであっ  
た。その点が、母の頭の中の他の住居人たちと異なるところだった。

私や弟妹たちは一緒にになると、よくそのことを話題に取り上げた。母は娘時代早逝した親戚の秀才少年が  
好きだったのであるとうことがみな的一致した意見であった。これ以外に考えられなかった。兄の方は  
姓が変っているくらいだから、あるいは許婚者になっていたのかも知れない。そしてこうした話になる度に、  
誰かが必ず、それにしても夫である父親と一生過したことを忘れてしまい、俊馬さんは俊馬さんとは俊馬さ  
ん一辺倒は困るというようなことを言った。この話はいつも笑いで打ち切られたが、確かにあるおかしさと、  
<sup>⑧</sup>思いがけないものを自分たちを生んだ母親が持つていて、それが今頃になって披露されたことに対する驚  
きとも、してやられた思いともつかぬものがあつた。

このことを知ってから、私の眼には老いた母の姿が今までは少し違つたものとして映るようになった。  
私も弟妹たちも母が少女時代の淡い愛情を一生胸に懐いて生きて来たからと言って、それを不快に思っ  
年齢ではなかった。またそのことを地下の父が知つたとしても、<sup>⑨</sup>父もまたさして特別な感慨は持たないだ

ろうと思われた。うむ、そうか。それでおしまいのような気がする。なにしろ七十年程昔のことで、私も、弟妹たちも、私の家の者たちも、しようのないおばあちゃんだなど口では言いながらも、どこかに涼風の通るようなを覚えないでもなかった。

私は子供たちに祖母をからかうことを禁じたが、しかし、家へ来ると、祖母の方から新しいことでも話して聞かせるような調子で、俊馬さんが――、を始めるので、子供たちも初めはまたかといった顔で取り合わないが、くどく言われると、どうしてもからかうことになった。母はいつも俊馬さんを口に出す時、一種独特な羞かみを含んだ表情をし、本当は言わない方がいいのだが、まあ、少しだけ話してみようかといったそんな娘々とした切り出し方で話した。母は自分が孫たちに耳に胼胝ができる程聞かせていることは忘れていたので、いつも話し出す⑩その態度には初心忘るべからずの、その初心のよさがあった。

私は母が俊馬さんの話を始めると、その顔に眼を当てた。昆虫の触角の動きでも観察するような興味があった。勿論、母は私の前では決してそんな話はしないので、母が子供たちと話している時、それとなく視線を母の方へやるほかなかったが、母の表情の動きにも凶々しいところはみじんもなく、ある躊躇らいと、羞かみと、そしてこの話をする時だけに示す一種の思い詰めたようなものが感じられた。母の顔を見守っていると、私は本当に母は少女の頃俊馬少年が好きだったのだと思い、その思慕をとうとうこの年齢まで持ち続けて来たのであろうかという感慨に打たれずにはいられなかった。老いに蝕まれた母の言葉にも表情にも老いとは別種のある哀れさがあった。⑪老人独特の樂天的な笑い声にも、時たま見せる放心の表情にも、こちらが一、二歩退がって黙って見ていてやらねばならぬといったものがあつた。

(井上靖「花の下」 講談社文芸文庫)

※注 築地 現在の東京都中央区にある地名

一高 東京大学教養部の前身である第一高等学校の略称

①-4

問一      に入ることをば次の中からそれぞれ選び、番号で答えなさい。

- 1 やはり      2 でも      3 もちろん      4 むしろ      5 つまり

問二  に入ることをば文中からぬき出して答えなさい。

問三  に入ることをば次の中から選び、番号で答えなさい。

- 1 あたたかさ      2 ひややかさ      3 さわやかさ  
4 あざやかさ      5 あでやかさ

問四 「①そうなんです」とありますが、どういうことを指していますか。その説明としてふさわしいものを次の中から選び、番号で答えなさい。

- 1 桑子におばあちゃんを預かってほしいと言われたこと  
2 私の母を家族のみんなが「おばあちゃん」と呼んでいること  
3 私の母が家に来ていること  
4 私の母がいつものように俊馬さんの話をしていること

問五 「②桑子から電話」とありますが、電話で桑子が話したことを文中からぬき出し、初めと終わり三文  
字ずつを答えなさい。

問六 「③子供たちのうわあつという歓声かんせいで母の声は消えた」とありますが、子供たちが歓声を上げた理由  
の説明が次にあります。ア  イ  に入ることを文中からそれぞれぬき出して答えなさい。  
なお  中の数字は字数です。

俊馬さんのことをア 7 と言っていたのに、イ 5 とのろけたから。

問七 「④あれじゃ、子供たちだつてからかいたくなりますわ」とありますが、なぜからかいたくなるので  
すか。その説明としてふさわしいものを次の中から選び、番号で答えなさい。

- 1 何度も同じ話をしているのに、それを忘れてくりかえすから
- 2 若いときに抱いた恋心こいじんを隠すのでもなく、自慢じまんげに話すから
- 3 祖母がやってくると俊馬さんのことを語るのが恒例こうれいになつているから
- 4 お祖父さんがないがしろにして俊馬さんのことを好きだと言いつけるから

問八 「⑤おじいちゃんに義理が悪いでしょう」とありますが、このときの美津の気持ちと同様な気持ちを  
表現していると思われる「私」のことを文中からぬき出して答えなさい。

問九 「⑥正系でない者」とありますが、だれですか。名前を文中からぬき出して答えなさい。

問十 「⑦いつまで経つても母の頭から消えないもののようにであった」とありますが、どのようなことが、  
頭から消えないのですか。文中のことはを使って具体的に説明しなさい。

問十一 「⑧思いがけないもの」とありますが、その説明としてふさわしいものを次の中から選び、番号で  
答えなさい。

- 1 孫たちのからかいかいにも負けずに、自分の大切な恋心を恥じらいを持って語ろうとする母の一途  
さ。
- 2 母が連れ添った父のことをすっかり忘れてしまい、初恋を語り続けるという老いの持つ残酷さ。
- 3 孫たちに囲まれて、七十年ものあいだ大事に温めてきた自分の恋心を楽しく披露ひろうする母のほが  
らかさ。
- 4 母が、少女のころの淡い恋心を七十年ものあいだ抱き続けていたという純情さとひたむきさ。

問十二 「⑨父もまたさして特別な感慨かんがいは持たないだろう」とありますが、どうしてですか。文中のことは  
を使って説明しなさい。

問十三 「⑩その態度には初心忘るべからずの、その初心のよきがあった」とありますが、どのような態度  
が初心のよさだというのですか。その説明となる部分を文中から八十五字以内でぬき出し、初めの十  
字を答えなさい。

「① 老人独特の楽天的な笑い声にも、時たま見せる放心の表情にも、こちらが一、二歩退がつて黙って見ていてやらねばならぬといったものがあつた」とありますが、このときの「私」の思いの説明としてふさわしいものを次の中から選び、番号で答えなさい。

- 1 老いがもたらす残酷なまでの記憶の喪失を憂い、同時に少女のころの淡い恋心を抱き続けている母の今は幸せであり、見守らなくてはいけないという思い。
- 2 老いて家族を忘れていく母の姿と、少女のころの淡い恋心を抱き続けている母の人生をそのままに受け入れなければならないという思い。
- 3 少女のころの淡い恋心を抱き続けている母のひととなりを尊重し、子供たちが母をからかわずにいてほしいという思い。
- 4 母の俊馬さんへの思いが老境の今になっても消えることがないことに、今更に気づいたことで、母の知らない一面を見たことに対する驚きと共にその純情さを尊いと感じる思い。

2021年度 国語 解答用紙

四										三	二	一	
問十三	問十二	問十一	問十	問九	問七	問六	問五	問二	問一	1	1	6	1
						ア	初め		1				
													ぐ
					問八				2	2	2	7	2
							終わり	問三	3				
										3	3	8	3
									4				
								問四					
						イ							
									5	4	4	9	4
												げ	
										5	5	10	5
問十四													

受験番号

氏名

計 点